



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	頼山陽の園芸趣味：書翰集からの考察( fulltext )
Author(s)	阿部,由美
Citation	学芸古典文学(11): 113-118
Issue Date	2018-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/150058">http://hdl.handle.net/2309/150058</a>
Publisher	東京学芸大学国語科古典文学研究室
Rights	

# 頼山陽の園芸趣味

—書翰集からの考察—

阿部 由美

一、はじめに

頼山陽（一七八〇—一八三二）は江戸時代後期の儒学者である。名は襄、通称は久太郎といい、父春水は広島藩の儒官である。現代においては著書として『日本外史』が広く知られているが、他に史論の『日本政記』、経済論の『通議』がある。『日本外史』は武家の歴史を列伝として書いた作品で、情熱的で平易な記述が市井に愛され、広く流布した。幕末の尊王攘夷運動に大きな影響を与えたことは周知の事実であるが、川越藩を始め多くの藩校で教材として扱われ、武士の子弟が『日本外史』に学んでいたことは思いの外知られていない。「尊王攘夷運動」が起ころ以前に既に多くの愛読者を抱える文豪であった山陽は「尊王攘夷運動」から続く「明治維新」で歴史に名を刻む文豪に押し上げられたが、同時に彼の作品はイデオロギーの書として位置づけられ、同時にそれ以外の評価をされなくなった。そして山陽自身の役割もそこに固定されてしまった。国家を揺るがす歴史的事象の中で用いられた書物は現代では敬遠され、頼山陽は現代では全くの無名の人となり、幕末の文豪の面影はない。

その頼山陽は大変筆まめな人であつたらしく多くの書簡を残している。現代まで残るその数は一千を超えるという。山陽の死後『山陽先生手簡』嘉永二年（一八四九）が出版されたという事実からも山陽の人氣が絶大であつたことが窺える。さらに昭和二年にもまた『頼山陽書翰集』が出版された。その本の編者である徳富蘇峰によれば

而して山陽自身も、おそらくは自己の手紙は必ず天地間に保存せらる可きものと意識して、認めたるものであらう。固より山陽以上に一生の間、多くの手紙を書いたものも、澤山はあるまい。

『頼山陽書翰集』上巻序文 四く五頁

とある。書簡からは多くの文人たちとの交流の様子はもちろん、その時山陽が興味を持っていた事柄、文物、感情が、時には文章で、時には漢詩として認められている。本稿はこの昭和二年民友社から出版された『頼山陽書翰集』を参照し、頼山陽なる文人がいかなる人物であるのか、その人となりや数を数多く残された書簡を

元に紐解いて行きたい。

## 二、山陽の住まい

山陽は広島に育つが、三十二歳以後は京都に住まう。京都在住までには紆余曲折あるが、本稿では言及を避けたい。京都での山陽の住居といえば現存している三本木の「山紫水明処」と名付けられた住まいが有名である。しかし、山陽は「山紫水明処」に住み続けたわけではなく、在京の文化八年（一八一―）と天保三年（一八三二）までの二十一年間に六回の転居を行っている。しかもその「山紫水明処」は二つあり、一つ目は文政二年（一八一九）と文政四年（一八二二）にかけて住んだ木屋町の家を指す。二つ目は京都での最後の住居である三本木の「西山荘」のうち、山陽自身の書齋と客を接待する座敷のある建物を指す。これに山陽は「山紫水明処」の名を再び付した。この二つの「山紫水明処」の間に一年七ヶ月だけ文政四年（一八二二）四月と文政五年（一八二二）十一月まで住んだ住居に山陽は「薔薇園」という名を付していた。風光明媚な木屋町から両替町のこの「薔薇園」への転居の理由を山陽は小野泉蔵（一七六七―一八三二）へ宛てた手紙の中で次のように述べている。

今度移候處は、洛中第一のじだらく町にて、じだらく者には相應仕候。（中略）舊寓（木屋町）は、景よすぎて候、飽申候。其上いつも河原に日のあたりたるを看詰候て、眼睛悪くなり、精神も散越仕候。夏は炎沙の氣難堪、涼しければ川風逼膚。病羸には大にあしく覺申候。東山・鴨水には別れあし

かりし。

東山や鴨川の風景から離れるのは残念だが、河原にあたる光を見て目を傷め、集中力も散漫で、虚弱な自分には前の住まいが良くなかったのだと述べている。しかし、眼病やその他の不調だけが転居の理由でもなさそうである。というのも前年十月に誕生した次男辰蔵の初節句を山陽はこの両替町の住居で迎えている。山陽は長男を自分の側で育てていないため、この辰蔵が山陽にとつて四十を過ぎて得た最初の子供と言つていい。そうした喜びや、新しい住まいで迎える初節句に気合を入れる父親としての山陽の様子が、母梅槩へ送った手紙からも窺える。この新しい住まいを山陽は氣に入つており、小野泉蔵へ送られた先の手紙は次のように続く。

されども、此度の讀書樓前、樹竹陰翳、四時花開、在城如在野も頗娛心候。

（文政四年月日欠）『頼山陽書翰集』上巻 五一九〜五二一頁  
また、母梅槩へ送った手紙にも

新築之處にて、大槩私に好ませ申候へ共、どふで人の家に御座候故、思様には無之候得共、大家作にて、上下五十疊程之處、庭も五間に三間、樹木を栽るには多餘地候。

（文政四年四月二十四日）同書上巻 四九二〜四九三頁  
と書いた。新築で私好みの家であり、一階二階合わせて五十畳。

庭も五間に三間の広さがあり、樹木を植えて楽しむには向いているとある通り、転居の後に山陽はこの家の造庭を熱心に行うようになる。

### 三、山陽の造園

五月・六月と転居の報告その他所用を述べる友人たちへの書簡に、山陽はいちいち造園のことを記している。そして七月になると咲き始めた花を楽しむ記述が増えていく。

・ 今日、庭拵どもに大取込、草々申留候。頓首。

(文政四年五月十一日) 同書上巻 四九五頁

・ 此度の家、市しながら山林、樹木數十品。手提鴉嘴、日々場師の態を作し候。苦樂相半候。

(文政四年五月十六日) 同書上巻 四九六〜四九八頁

・ 僕(四月二十六日) 両替町に移居、東山・鳧水の景はなければ、後園を鋤荒、栽花竹、深遼茂密か、如在林野、反愈於樵巷(木屋町)之太閤露候。

(文政四年六月二十一日) 同書上巻 五〇六〜五〇七頁

・ 浴而呼酒、剪荷葉為杯、嗅茉莉為肴

(文政四年七月六日) 同書上巻 五一八〜五一九頁

最後の四点目の書簡に注目したい。入浴後に蓮の葉を剪って杯とし、茉莉の香りを嗅いで肴にするのである。驚くべきはその庭に茉莉(ジャスミン)が植えられていたことである。ジャスミンはアジアからインドネシアにかけて広く分布する植物で、江戸時代

の京都に一般的に流布している植物ではない。いつ頃日本に伝来したか定かではないが、中国あるいはオランダとの貿易によって日本にもたらされた外来種である。その珍しい植物を山陽は早速自分の新居に植え、鑑賞していた。珍しい物品を好み、それを入手し鑑賞する様子が浮き彫りとなる一節である。また、このジャスミンは文政四年八月九日に押し花として梅麩に贈られている。後述するがこの時京阪を暴風が襲い、多くの被害が出た。また、文政四年の天候は不順であつたらしく、関東では早魃が起こっていた。各地に様々な異状があることを憂え、広島にいる母のことを案じて見舞いの手紙と共に押し花を贈った。おそらくまだ広島にはなかつたであろうジャスミンの花を母に見せたくて、可憐な花の押し花を作り「色、眞白のものに御座候、色かはり申候」と説明を付している。この時すでに父春水は亡くなっており、故郷に残してきた母を案じる子としての山陽の姿が垣間見える。そして、自分のお気に入りのおもちゃを自慢したくて仕方ないあどけない子供のような側面もまた、山陽の中に存在していたように見受けられる。この目新しい植物について山陽の興味は尽きる事がなく、後日、小石元瑞(一七八四〜一八四九)にジャスミンを鉢分けして贈っている。その際に詠んだ詩が残っているので掲載しておく。(以下の漢詩二点は昭和七年、頼山陽先生遺蹟顕彰会発行の『頼山陽全書(詩集)』徳富猪一郎監修・木崎愛吉・頼成一共編からの引用である。)

贈元瑞以茉莉

元瑞に贈るに茉莉を以てす

一盆茉莉數花坡

一盆の茉莉 數花坡く

擬送嬌香侑晚卮

嬌香を送りて 晚卮を侑むるに擬す

記否鳧川納涼夕

銀燈影裏看氷肌

記するや否や 鳧川 納涼の夕  
銀燈 影裏 氷肌を看るを

『頼山陽全書(詩集)』三四九頁

一鉢のジャズミンにいくつかの花が開いた。花は艶かしい香りを放ち、まるで私に晩酌を勧めているようだ。あなたは覚えておられるか。夏の夜、鴨川で灯火のうちに氷のように艶やかな肌を見たことを。というのが大意である。鴨川沿いの木屋町「山紫水明処」で夏の夜に見た女性の肌をジャズミンから想起しているのだろうか。この詩は特に書簡に書いて送られたものではないようだが、花を愛し、酒を楽しみ、そしてそこに女性の存在を匂わせる随分艶めいた内容の詩である。

ジャズミンの他にも山陽の「薔薇園」には多くの植物が植えられていたことが、それぞれ梅麿や文人達への書簡から窺える。「薔薇園」の名を冠するに至ったのは当然、薔薇が庭に植えられているからで、「長春」と呼ばれる薔薇がこの庭にあったことが前述の八月九日の梅麿への書簡からわかる。尚、その薔薇についても山陽は詩を残しており、詩からその薔薇が庭の南側に植えられていることが推察される。

無題

鋤荒栽樹汗沾衣

稍覺園容綠四圍

更慮南籬春寂寞

又待疎雨挿薔薇

無題

荒を鋤き 樹を栽えて 汗衣を沾す

やや覚ゆ 園容 緑四圍なるを

更に慮る 南籬 春寂寞たるを

また疎雨を待って 薔薇を挿さむ

『頼山陽全書(詩集)』三四五頁

鋤を持って荒れた庭に樹木を植えているので汗で着物が湿っている。その造園作業の時にふとこの庭が四方緑に囲まれていることに気がついた。植えた植物を見渡して南側の垣根に春の趣が物足りなくなるのを想像した。そこでまた雨を待って薔薇を挿そうと考えた。この詩から山陽の造園に対する一方ならぬ情熱が窺えはしまいか。ジャズミン・薔薇(長春)に加え、牽牛(朝顔)・石竹・木犀・海棠などが書簡・詩に登場する植物であった。さて、庭の植物が山陽の目を楽しませ、自慢の庭になろうとしていた矢先、文政四年八月四日暴風雨が京阪を襲う。この暴風によって新築の家屋は大きな被害を被るが、庭はそれほど大きな影響を受けなかった。その安堵を弟子の後藤松陰(一七九七〜一八六四)宛の手紙で伝えている。

(八月) 四日の夜、大風甚雨、屋瓦皆飛、光武昆陽之戦の時も不過之と存候。僕僑居、上漏下 湿、琴書皆失其所庇、独新築園中、樹竹皆無恙、但牽牛籬倒耳。

(文政四年八月九日)『頼山陽書翰集』上巻 五二六〜五二七

この書簡の主だった内容は後に続く「佩文韻府」の大坂での相場がいくらかを問うことと、松陰を同人会に誘うことであった。しかし、手紙の冒頭で京阪を襲った暴風雨の威力を、中国の新の没落と後漢の新興のきっかけとなった昆陽の戦いの最中に起きた暴風雨になぞらえ、それよりも凄かったと評している。その暴風雨で家屋及び書籍・家財道具は大きな被害を受けているが、「庭は無事」であったことを態々述べている。しかも「但だ牽牛の籬倒る

るのみ」と言いながら、その朝顔が風に倒されたことを題材に七言絶句の詩を書簡につけていることから、文人にとって必要な「琴書」を失うこと以上に朝顔が台無しになったことの方が山陽にとっては何れも悔しかったようだ。

#### 四、江戸時代の園芸熱

山陽の園芸に対する熱が過剰な印象をその書簡から得ているが、そもそも江戸時代における園芸とは庶民にとってどのような位置付けであったのかを考えてみたい。現在の日本で全国的に見る「ソメイヨシノ」は江戸時代に染井村で造られた桜だということから、江戸の植木職人たちには腕があり、需要があるから造られたのだとしたら、江戸時代の庶民にとっての花は現代人と花との距離よりずっと近いものだったと推察される。例えばそれがわかる資料として山陽の師である菅茶山（一七四八〜一八二七）の著書『筆のすさび』を挙げたい。『日本随筆大成（第一期）』1—140—141頁に収められた『筆のすさび』『奇樹』の項を参照すると、珍しいからたちの花の十盆を売りに来た商人が百余金を手にして帰ったという記録がある。その他、変わった盆栽や蘭の花に高値を払って買う人物が多くいたこと、加熱する園芸熱を鎮めるために公が珍しい植物の売買を禁じたものの、それを守らない人が多くいたことなどが記されている。朝顔の変った品種が特に持て囃されたために品種改良が繰り返され、よくできた種は高値で取引が行われていたとある。「筆のすさび」は安政四年（一八五七）刊行の随筆である。「奇樹」の項に見られる元号は「寛政」「享和」「文化」「文政」とあるため、一七八〇年〜一八三一年までの間に菅茶

山が見聞した園芸に関する出来事とそれに関する菅茶山の所感が述べられていることになる。風変わりな植物を愛好し、それに大金を払う好事家が現れ、そういう人を対象に商売をする人が現れ、鉢植えを譲りたくない人が夜逃げまでする。そういう園芸熱に対して菅茶山はどこか冷めた目で見つめており、「かゝる事をり／＼にあることにや」と述べて締めくくっている。もしかしたらその呆れた対象の中に彼の弟子である山陽も含まれていたのかもしれない。

この幕末の園芸熱に関しての資料は多く残っており、興味深いのは外国人が残した資料にも幕末の江戸の園芸についての著述があることである。山陽の死後の資料ではあるがイギリスの植物学者、ロバート・フオーチュンは、“visits to the capitals of Japan and China, 1863.”（邦題『幕末日本探訪記—江戸と北京』三宅馨訳）の中で、江戸染井の植木職人の様子について語っている。

その村（染井村）全体が多くの苗木園で網羅され、それらを連絡する一直線の道が、一マイル以上も続いている。私は世界のどこへ行っても、こんなに大規模に、売り物の植物を栽培しているのを見たことがない。植木屋はそれぞれ、三、四エーカーの地域を占め、鉢植えや露地植えのいずれも、数千の植物がよく管理されている。（中略）寒い冬の間、弱い植物を保護するために、みんな一緒くたに詰め込んでいる。そこでサボテンやアロエのような南米の植物を注目した。それらはまだシナでは知られていないのに、日本へは来ていたのである。実際それは識見のある日本人の進取の気質をあらわしている。かわいらしいフクシヤの種類があったが、また別

の外来種も目についた。

『幕末日本探訪記』 一一二—一二三頁

どういうルートを経由して日本に齎されたのか南米の植物が一八六三年の江戸には既に伝わっていた。ロバート・フォーチュンをして「識見のある日本人の進取の気質」と言わしめたように、江戸時代の人々は新しく齎される文物を好意的に受け入れ、自分たちの生活に取り入れようとしていた。新しい物・珍品・奇品と呼ばれるものを愛したのは江戸時代の人々の気風であったようだ。そういう意味では山陽の園芸に対する情熱もそれほど特異なものではなかったと言えるのだろうか。進取の気質を持った識見のある日本人の一人としての頼山陽をそこに見いだすことができる。

## 五・おわりに

本稿では山陽の書簡から山陽が愛好した園芸に関する記述を抽出し、山陽の人物像について考察してきた。初めて自分の手で育てる子どもの存在に喜びを見出し、花を育て、詩を詠み、酒を楽しむ生活に山陽が大層満足している様子が窺える。あるいは造園に励む己を陶淵明に模っていたのかもしれない。しかし、土いじりをしながら六朝の文人よろしく妻子と穏やかに暮らすには、山陽の好奇心は強すぎた。そして文人間の交流もまた盛んすぎた。書翰集および山陽の漢詩には花の他にも興味を持った西洋の文物についての記述が数多く残っている。「識見のある進取の気質」の日本人の一人であった山陽は当時の日本、当時の西洋文物、あるいはそれらの文物から見える時代の動きをどう捉えていたかを紐

解いていくことが今後の課題となる。

(あべ・ゆみ／東京学芸大学大学院修士課程)